



和文教科書
方丈記
五卷

成
年
十
七
号

共
八

ホ 2
218
5



源歌子編輯

和文教科書

東京書肆 中央堂發兌

東京書肆
學校圖書

附
巻
218
5

和文教科書五之巻

美濃 源 歌子 編輯

方丈記

鴨 長明

行く川のながれも、鐘をきくとも、志かきも、本の水よ
あらず。よとみよ、浮ぶうたかごとも、かつきさるから
結びて、くしくり、まゝなる事なり。世の中よあふ人
とずみかこ、又かくのごとく。おまの神のうらみ
棟を穿て、毫をあふて、たかき、いやしきく
の住居を代々、へて、盡せぬものなれど、是をま

源歌子編輯

和文教科書

東京女子師範 中央女子師範



新刊
218
巻

和文教科書五之巻

美濃 源 歌子 編輯

方丈記 鴨 長明

行く川のながれも、遠くへ流れて、志かき、本の水も
あらず。よどみよ、浮ぶうたかごも、かつかさるゑ、か
はびて、えくく、まゝなる事なり。世の中よ、あふ人
と、すみか、と、又、かくのごとく。玉子の都のうらちよ、
棟をたぐ、毫をあつて、くさる、たかき、いやく、きん
の信居を、代々をへて、盡せぬものなれど、是をま

和文教科書 五之巻 〇一

ことかとたづぬれども、むづし、ありし家をまればなり。あるを去年やぶれて、今年を作りあるを、大家ほろびて、小家となる。すむ人も、是はおなじ。所もかろうす。人もおほかれど、いよしく、えしく、二十人の中よ、つがよ、一人二人なり。朝よ死よ、夕ようまう、なうひ、たぐ、水の流みぞ、似たりける。志はず、うまれ死ぬる人、何方よりきこりて、いづかへよ、ある。又、ちうず、かりのやどり、誰が為めよ、心を悩し、何よりて、目をまろ、こころある。其あるごと、すみか、と、無常をあうそ、ふさま、

いよ、朝がほの露よ、こころなうす。あるを、露はちて、花残り。雨としく、朝日よかれぬ。あるを、花を志ぼみて、露なほきこ、消すとしく、も、夕をまつことなり。予物の心を、志残りしより、このか、四十あまりの、春秋を、送れるあひご、世の不思議をみる事、や、たびく、よなりぬ。去安元三年、四月廿八日、のよ、風ばげ、吹きて、志づかなう、ざりし、夜成の時、むかり、都のたつみより、火出きて、いぬある。そ、そよ、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省など、まて、編りて、一夜の程よ、塵灰

とちりよき。火おこ、樋口富小路とこや、病人をや
どせる、かりやより、せどさりとなむ。吹きまらふ
風よ、とかく、穢り行くほど、扇をひらげさるが
ごとく、す急ひちよなりぬ。とほき家を、烟よむせ
びちかきあたりを、一向、炎を地よ吹きつけり。
をよを、灰を吹きたを、火の光よ映じて、あ
まねく、紅なる中よ、風よたぐず、吹きまらる。
笑とがめくよして、一こ町をこえつ、移り行
く、其中のくうつとらあらんや。あるひを、烟
よむせびてたふれや、或を笑よまられてたち

○やぶち
この詞を、あり
まじりとい
ふ志の教語な

まちよ死ぬ。あふひを、又、まづかよ、身つらからく
しそのがれたれども、資財をとりゆるよ及ぼす
七珍萬寶、いながら、灰燼となりよき。其費いそそ
ぐくぞ。此たび、公卿の家、十六焼けり。まして、其
外も、かぞへ記すよ及ぼす。すべて、都の中、三分が
一よ、及べりとぞ。男女死ぬる者、數千人、馬牛の類、
邊際を知らず。人のいとちうみ、みな愚なる中よ、さ
し、あやふき、京中の家を、ゆるとて、寶を費やし、
心をちやます事、すづれて、あぢきなくぞ、侍る
べき。又、治承四年、卯月廿九日のころ、中御門、京極

るくし一の巻
徒然軒のぬき
ほよつちが
如くたれを對
話ならぬ事
文よそいふよ
しき詞なり。

の程より、大なる辻風おそりて、六條よりまで、
いかめしく、あきける事、侍りき。三四町をかけて、
吹まゆるまゝ、よその中よ、こもれる家ども、大な
るも、ちひさきも、つらとて、やぶれざるをなす。
さながら、ひらよたふれさるもあり。櫛柱ぞかり、
残れるもあり。又、門のうへを、吹きはらうて、四五
町が外よ、おきまゝ、垣をふきはらひて、隣とひと
つよをせり。いそんや、家のうちのたから、敷をつ
くして、およあがり、檜皮葺の類ひ、冬の本の葉の
風よ、乱るゝうぐぐ。塵を烟のごとく、あきたて

たれを、すべて、目も見ええず。おびたゞしく、なりと
よむ音よ、ものいふたも、きこえず。彼地獄の業風
なりとも、かたうりよ、いとぞ、おほゆる。家の損亡
せらるのみならず。是をとりつらふよ、身をそ
らたひて、かたをうづけるひと、敷をあらはず。此風ひ
つゞさるのか、よ、移りゆきて、おほくの人の、な
げきをなせり。はかせそ、つねよ、吹くものなれど、
かゝる事やとある。たゞごとよ、あらはず。さるべき、
ものいさそ、いかなどぞ、うたがひ侍りし。又、おな
し年の、みな月のころ、よ、たかよ、都遷り侍りき。い

とおもひの外なり。事なり。大かへ、此京の、始
をきけむ、嵯峨天皇の御時都とさうたまりよける
より後すてよ、數百歳をへり。ことなる故なる
て、たやすく、改まるべし。あらぬを、是をよめ人
たやすく、からず、慈ひあへる様、ことわりよも、過ぎ
り。されど、どかくいふかひなく、御門より、始
めたてまつりて、大臣、公卿、とゞく、攝津國、難波
の系よ、うつりたまひぬ。世よ、つかあるほどの人
誰より、り、故郷よ、のりをらむ。官位よ、思ひを
かけ、主君のかげを、たのむほどの人、を、一日なり

とも、どく、移らるむと、を、げみあへり。どき、を、う
たひ、世よ、あまされ、て、終する所なきものを、慈ひ
ながら、とまりをり。軒を、あらそひ、一人のすまゐ
日を、へつ、荒れ行き。家を、こぼされて、淀川より
かび、地を、目のまへよ、島と、なる人の、らる、皆あ
らたまりて、たゞ、馬鞍を、のみたもらす。牛車を用
とする、人なり。西南海の、所領を、のみねかひ、東北
國の、庄園を、を、好まず。其時、おのづから、事の、たよ
りありて、攝津國の、今の系よ、いたれり。所の、あり
さまを、みるよ、其地、程せば、くて、餘里を、とらよ、た

○あつらひ
このあつらひあり
といふべきなり
拾遺といづれを
あつらひといふ
んみまの山あり

らず。北も山に傍ひて、高く、南も海に近くて、下れり。波の音、常よかまびすしくて、汐風、ごとよそげしく、内裏も、山の中なれども、かの本丸殿も、かくやと、中々やうかとりて、優なるかとも侍りき。日々よらぼちて、川もせきあへず。をらびくぐす家も、いづくよ、住れるものあらむ。狩むなりき地も、たほく、造れる屋も、すくなし。古郷も、既にあれて、新都も、いまどならず。あると一ある人を、みま、浮雲の、思ひをなせり。本より、此所よ居れるものも、地をうらなひて、愁へ、今うらり住む人、土木の、煩

とくあつらひ
ぞあつらひとい
つる例なり。此
も、有字のみを
書きたり。か
ありて、それをか
きあやまれり
しなるん。

ひある事を、勤く、道の邊をみれど、車よのらべきも、馬よのり、衣冠、布衣、たよりべきも、おほく、並垂をきたり。都のてがり、たちまちよ改まりて、たびひなびゆる武士よ、ことならず。是れ世の乱る、瑞相との、聞きおけるも、さるく、日をへつ、世の中、うきもたちて、人の心も、さしあらず。民のうれくつひよ、むなしからざりければ、同年の冬、なほ此京よ還りたまひよきされど、さほちりさせり。家どもも、いかよ、なかりよけるよ。この、悉く、もとの様よし、もつらふ。ほのかよ、つらへ聞くよ、うら

のかゝるとき御代をも憐みをもて國を治め治め。則ち御殿に茅をふきて軒をたよもそのへず。煙のともしきをたたまふとまをかざりあるみつき物をさくゆるさるれき。是民を恵み世をたすけ治ふよよりてなり。今のよの中の有さま昔よちぎらへて知りぬべし。又養和の比とよ久くをたりてたしかよもおぼえず。二年の間世の中、飢渴して、浅ましき事、侍りき。或も春夏日なり、或も秋冬、大風、大水などよからぬ事、ども、おつぎきて五穀ごとくくみのらす。そし、毒耕、夏樹ら

○そのめき
此詞を、あき、十
一、よ、う、う、ら、し、も、え
友の驛、よ、か、ん、さ
あ、ら、心、も、あ、ら、ん
を、い、れ、ぞ、う、う
き、と、あ、ら、が、や、く
驛、く、ま、た、り。

いとたのみのみありて、秋刈り、冬ほろ、そめきもな
し。是よよりて、國々の民、或も地をすて、塚をい
て、或も家を忘れて、山よ住む。様々の御祈り、もど
まり、たぐて、なうぬ法とも、祈らるれども、さらよ、
そのちるしなり。京のたうひ、ちよよとよつけて
も、みなもとを田舎をこそ、たのめらよ、鏡えて、の
ほるものなけれど、そのみやをみさをも、祈りあ
つむ。念ど、佳びつ、様々の寶もの、かこもしより、
捨らるごとく、すれども、さらよ、目、みたらつるひと
もなし。たまかく、交るもの、金をかろく、粟を

おもくす。乞食道のべにおほく、徳ひかなしぶ聲、
耳よみたり。前の年かこのごとく、からくして暮
ぬ。鳴る年を、たちなほるべきのとおもひ程よ、あ
まそく、えやみ、おつごもそひてまさる様よ、跡か
たなし。世の人みな、飢死よけれど、目を淫つて、ま
そまりゆくとま、少水の魚のたそくよかなしり。
ちてよを、望うちき、是ひきつてみ、よろしき姿志
ころ者、ひたすら、家ごとよ、そひありく。かく、まひ
忘れころものども、ありくかとも、れを、別ち、たふ
れふしぬ。つらひちのつら、路の頭よ、飢急死ぬる

類ひをかずも、とらす。とりすつら、もぞもなけれ
だ、くそき香、世界よ、みちして、愛りゆくと、ちち有
さま、目もあそり、れぬ、事おほかり。いとむや、川原
なごよを、馬車の、行きちがよ、道ぶよもなし。あや
しきも、つら、おつらも、かつきて、世よ、さくも、
ちりゆけだ、たのむか、なまき人、をみづから、家を
こぼらして、市よ、出で、うらよ、一人お、持て、出ころ
あたひ、なほ、一日お、命を、さくあるよ、ぶよ、及を、す
とぞ。あやしき、事、か、新の中よ、丹つき、白金
黄金の、そく、たご、所々よ、つききて、みゆる、木の、りれ

○もぐりー
ぬぞむぐりー
して結びし
しあふす。下
事そといふべき
かいらを者ま
つらなる。此格
空穂源氏か
もも多し。もを
結びしぞと
を思ひまがへそ。

あひまどれり。是を尋ぬれど、すべき方なきもの
の古寺ありて、佛をぬすみ、堂の物の具を、やぶ
りとりて、とりくづけるなりけり。濁悪の世も、
も、生れあひて、かゝる心なきものをなむ、侍り
し。又いとあわれなる、事も侍りし。ざりがさき女
男など、持ちく者も、その思ひまよりて、志ふか
きをかならず、さきだちて死ぬ。其故を、我身を、
次よなして、男もあれ、女もあれ、いたし
思ふか、よ、たましく、とひ得る物を、さづゆづ
し、よりてなり。されを、親子あるものを、定まらる

○九條より北
北の上ふか
いふが、脱ちし
ぞ。

なりしひきて、親ぞ、先立ちて死よける。又母が命盡
きて、あせるを、志しずして、いとけなき子の、その
乳房すすひつきつ、あせるなごも、ありけり。仁
和寺よ、慈尊院の、大藏卿隆暁法印といふ、人かく
しつ、数も志しず、志ぬることを、悲しみて、聖を、
あまこ、かゝるひつ、その首のみゆるごとよ、額
よ、阿字を書きて、縁を、結ぶ。も、むらぶを、なむ、せ
られける。その人数を、志しむとて、四五兩月がほ
どが、ぞく、とりけれど、京の中、一條より、南九條
より、北、京極より、西、朱雀より、東、道の邊よ、あ

る頭すべて、四萬二千三百餘をむ、ありける。況んや、その前後よ、死ぬるものも、多く、川原、白川、西の京も、ろくろの邊地などを、くろくして、いそい、際限もあるべからず。いかよ、いそむや、諸國七道を、やく近くも、崇徳院の沖位の時、長承のころ、ろくろとよかゝるため、いそむ有りけりと、聞けど、その世の、ありさまを、おぼえず。まのあたり、いと、めづろ、かよ、かたかりし、ことなり。まゝ、元暦二年のころ、犬を、あふること、侍りき。そのさま、よのつねならず。山を、くづれて、川を、うづみ、海を、かたがき、て、陸地を、ひ

たせり。土さけて、水、うきあがり、巖、こけて、谷、よまろび入り、渚、くゞ、舟も、波、よたゞ、うひ、道、行く、駒を、嵐の、ま、ち、どを、ま、どを、せり。いそんや、都の、ほ、り、み、を、在、々、所、々、堂、舎、塔、廟、ひ、つ、と、て、また、か、ら、ず。威、を、く、づ、れ、あ、る、も、た、ふ、れ、ぬ、る、間、葦、灰、ま、ち、上、り、て、威、り、あ、る、烟、の、ご、と。地、の、震、ひ、家、の、や、が、る、音、い、か、つ、ち、よ、こ、と、な、ら、ず。屋、の、中、よ、を、れ、を、忽、ち、よ、お、ひ、げ、な、む、と、す。そ、ろ、り、お、れ、を、又、地、を、れ、さ、く。羽、を、け、れ、を、あ、へ、も、あ、が、る、べ、か、ら、ず。龍、な、ら、ぬ、を、雲、よ、も、の、ほ、ろ、む、こ、と、か、こ。恐、れ、の、中、よ、だ

○おぼえ侍りし
此まづりし上
ふこそとかり
これ侍りし
とこそいふべき
をいふのみい
つらも侍りし
やうなれども
後撰ふ紅毛
をいふ時とみ
しりども時
とみふふてこ
そこいふよあ
るもあつて稀
えのらる例も
あらう。

そらべかりけるも、たゞ地震なりけりところを覺
え侍りし。その中よある武士の、ひとり子の六七
だかりよ侍りし。ついにむぢの、おほひの下よ小
家をつりて、をかなげなる、跡なごとをいして、
おび侍りし。俄よくらげれうめられて、あとか
なく、ひらうらひきかれて、その目なご、一寸
だかり、うちいひさるるを、父母かへて、聲も
惜もず、かな〜みあひて、侍りし。こそあそれよか
な〜と思侍りし。子のかな〜みよも、猛きもの
も、恥をさすれけりとおぼえて、いとを〜、埋り

○或
或の下よむと
いふが、脱ちた
るべし。

かなとぞ、見侍りし。かくおびたぐ〜、ある事を
おぼ〜よてやみよ〜るども、其餘波志〜、遠え
ずよのつねよ、驚くほどの地震、二三十度、うね
目もな〜。十日、廿日、過ぎよ〜あを、やう〜、間どほ
よなりて、或四五度、二ニ度も〜、一日ませ、ここ
日よ、一度なご、大か〜、その名残、三月をかりや侍
りけむ。四大種の中よ、水火風も、つねよ、害をなせ
ど、大地よ、い〜りても、殊なる変をなさず。むか〜
齊衡のころのよ、大なるふりて、東大寺の佛の
み〜、落ちたご〜、いみじきことども、侍りけ

○たのぶよの
たのぶよの

れど、なほ此度よそ志かずとぞ。別ち人みなあぢ
きなきことを述べてしむか、心のよごりも、う
すらぐるとぞ。――ほどよ月日かきなり、年越え
後、も言の葉よかけて、いひゆる人だよなり。すべ
て、そのありにききと我々と、栖とのをわたく
あぢなる様まかへのごとし。いふむや、所よよ
り、身のほどよ志しがひて、心をなやますことを
あげて教ふづかひず。も――おのづから、お教なら
ずして、権門のかきも、らよ、居るものを、ふかく悦
ぶことを、あれども、大よ、樂ぶよあつたず。歎き

○たのぶよの
たのぶよの

せつなるときも、聲をあげて泣くことなり。道に
やすからず、立居よつけて、恐れをのくさま、た
とく、雀の鷹の巢よ、ちかづけるがごとし。も――
貧しくして、富る家の隣よ、をるものを、朝夕すば
き、姿を取らて、遠ひつゝ、おで入り、妻子、僮僕、のう
らやめ、ささまを、みるよも、富る家の人の、たのが
――ちかづき、きき、を聞くも、こころ、念々、ようご
きて、おまとして、やすうらうら。も――せど、き地よ、居
れど、近く、あ上するとき、その害を、痛くすることな
――も、邊地よ、あれを、往及、つらひ、おほく、盗賊

の難をなすべし。又、いさほひあるものも貪欲ふ
かく、ひらりあつたものも軽き。寶あれ
ど、おそれ多く、貧しけれど、なげき切なり。人をた
のめを身、他のやうことなり。人をたごめを心、
恩愛よつかもる。世よ志こかくも、あつた。まこ
志こがしぬを狂せるよ似たり。いづれのとら
を志め、いかなるよ志を志てあ、志を。此身を
やご。玉ゆるも、心をなごさむ。いさ。まが、父の
方の、祖母の家を傳へて、之。彼所よすむ。其後、
縁かけ、おれらうて、恐ぶかご。志げかり。あ

○すむ
すむすすき
といふても現
在のことなり

よふ、く
ひ、祖ありて
時、あつた
す、傳写のあや
ま、り、あや、あ
る、べし、らん

む、つひよ心ごむる事を、得ず。三十餘よ
て、ごらよ、我心と、一の菴を結ぶ。是を、あり。住居
よ、なごらよ、あつた。たご、居屋をかり
をかまへて、を、かご。く、を、つくるよ、及ぶず。
つご、かよ、築土をつけり。と、いへども、門をたつる
よ、たつた。竹を柱と。て、車やごり。とせり。雪
あり、風ふく、毎よ、あやあか。ご。もあつた。所を、
川原ちかけれど、水の難もあつた。名浪のおそれ
も、さつた。ご。すべて、あつた。ぬ世を念ご。ご。つ。心
をなご。せらる事と、三十餘年なり。その間、折々の

たがひめよ、おのづから、みづかき運をさとりぬ。
すなわち、五十の春を迎へて、家を出で、世をそむ
けり。もとより、妻子なけれど、捨てが、きよすが
もなし。が、官禄あらず。何と付けて、執をせど
めむ。もなしく、大原山の雲よふて、又、五わたり、
春秋なんへよける。爰よ、六十の露、まきかゝり、
よびて、さらよ、末葉のやどりを、捨ぐる、ことあり。
いそい、旅人の、一夜のやどをつり、老のこゝろ、
のまゆをいとまじびごと。それを、申比のすみ
かよ、たがはず、あれを、まゝ、百ちが、一よ、ごも、及ぶ

○せむぎ
せむぎの下ふ
まゝのふが、腹ち
こゝろ

ず。さかしく、いほほど、年々よか、さきすみ
かも、折々せむぎ。その家のありさまよ、のつねな
らず。廣きところかよ、方丈、高さを、七尺を、かりな
り。所をおもひ、室あやるが、故よ、地を、志めて、ほら
ず。土石を、くみ、おほひ、を、ふき、て、つぎ、あごとよ、
かけ、ぬを、かけ、り。も、心よ、かた、し、ぬ、こ、あ
ら、だ、やす、く、外よ、福、を、む、が、為、女、なり。その、改、め、造
る、とき、い、い、の、傾、ひ、あ、る。つ、む、と、こ、ら、か、ら
か、よ、二、兩、なり。車、の、力、を、む、く、ゆ、る、外、を、さ、ら、よ、他
の、用、途、い、ら、ず。いま、日、野、山、の、奥、よ、跡、を、か、て

後、ひびく。一、二、三尺あまりの、ひびく。をさ。て、柴
をりく。あ。う。す。が。と。す。南。二。假。の。日。か。く。を。さ
し。ひ。び。く。て。竹。の。簀。を。志。き。その。西。二。阿。伽。棚。を。つ
く。り。中。よ。も。北。よ。よ。せ。て。障。子。を。隔。て。阿。弥。陀
の。畫。像。を。安。置。し。さ。ば。よ。普。賢。を。か。け。ま。へ。よ。法。華
經。を。お。け。り。東。の。ま。を。よ。む。ら。び。の。お。ど。ろ。を。志。き
て。よ。ろ。の。床。と。す。西南。二。竹。の。つ。り。棚。を。か。ま。へ。て。
くら。き。皮。籠。三。四。合。を。お。け。り。す。な。を。も。ち。和。歌。管。絃。
往。生。要。集。ご。と。き。の。抄。物。を。い。れ。ら。り。侍。ら。よ。箏。琴。
琵琶。の。く。一。張。を。た。ら。い。を。ゆ。る。を。り。箏。つ。ぎ。琵琶。

これなり。假の庵のありさまかくのごとく。その
とららのさまをいとも、南よかけひあり。岩をた
とみて、水をためたり。林の本、ちかけれを、つまぎ
を拾ふよ、とも。からず。名を、外山といふ。正木の
かぐら、跡を埋めり。谷、志げれど、西を晴れらり。
観念のたより、なきよ。もあらず。春を、藤波をみ
る。紫雲のごとくよ。て、西方よ、旬ふ。夏を、ほとく
ま。す。を。聞。く。か。た。ら。あ。ご。と。よ。死。子。の。山。路。を。ち。ぎ
る。秋を、ひびく。の。聲。耳。よ。み。て。り。空。蟬。の。世。を
か。た。ら。い。む。と。聞。ゆ。冬を、雪を、憐。む。つ。り。き。ゆ。る

さま、罪障またとくつづ。も一念佛ものうく、讀
經まめなうとさるときを、みづからやしむみづか
らをさうとさよ、さままたさう人もなく、まゝ、取づべ
き友もなう。殊更、無言をせざれども、ひとり
れむ、口業ををさめつべし。かならず、禁戒をまも
るとし、もなけれども、境界をけれど、何よつけて
み、やぶらん。も一跡の白波、月をよする、朝よを、
岡の屋よ、ゆきの舟、船をながめて、満沙弥の風情
をぬすみ、も一桂の風、葉をなうす、夕よを、潯陽の
江を思ひて、源都督のながれをなうす。も一餘興

あれむ、志をく、松のひびきよ、秋風の樂をたぐく、
水の音よ、流泉の曲をあやつる。藝を、これ、つたな
けれども、人の耳を、悦ぶ、も一あむとよもあらず。ひ
どり、調へ、獨詠して、みづから、心を養ふ、わかりな
り。まゝ、禁よ、つらの葉の庵あり。別ち、此山守が居
る、いところなり。か一こよ、小童あり。時々、さうりて、
あひ訪ふ。も一づれぐ、なる時を、是を友と一して、遊
びありく。かれも、十六歳、それ、むさび、其齡、こ
の外なれど、心を慰むる事、これ、同し。或、つづ
かをぬき、岩なうをとる。又、ぬかごを、もり、芥をつ

む。或もずそのの、田井よありて、落穂をひろひて、
ほぐみをつくる。もし、日、うらうらかなれど、嶺よよ
お上りて、遠つよ、故郷の空を望み、本幡山、伏見の
里、鳥羽、羽束師をみる。勝地も、まなけれど、心を慰
むるよ、障りなし。あゆみ、傾ひなく、志、遠くいへる
とき、是より峰つぎ、炭山を越え、笠取を過ぎ
て、或、岩間よまうで、或も石山ををがむ。もしも、栗
津の原を、分けて、蟬丸翁が跡を、どがらひ、田上川
を渡りて、猿丸大夫の墓を、たぐぬ。かくるさよを、
折よつけつ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨ををり、

○或
或の下よむと
いふが、脱ちた
るべし。

木のみをひろひて、且も、佛よ奉り、且も、家づとよ
す。もし、夜、志づかなれど、窓の月よ、古人を志の
び、猿の聲よ、袖をうるほす。草むらの螢も、遠
く、真木の嶋の、かぎりびよまがひ、曉の雨を、おのづ
から、木の葉吹く、嵐よ似たり。山鳥の、ほろろくと
鳴くを、聞きても、父か母かと、うたがひ、峰のか
せぎの、近く、馴れたるよつけても、世よとほぎか
るほごを、しる。或も、埋火をかきたて、老のね
がめの、友とす。おそろしき山を、らねど、あきらみ
の、急を、あそむよつけても、山中の景氣、折よ

つけて、つゝるごとくなり。いそんや、ふかく思ひ、深く志ねらん、人のためも、是よしも、限るべからず。大かゝ、此とらるゝ、住み初め、ときを、白地と思ひしほど、今すて、五とせを経り。假の菴も、やゝある屋となりて、軒も、朽葉、あかく、土居も、苦むせり。おのづから、事のたより、都を聞けむ、此山は、籠りて、後やむごとく、なき人の、かくれたまへるも、数多きことゆ。まゝして、その数ならぬたぐひ、盡して、是を志るべからず。たびぐの突上、ほらびたる家、まゝ、いそをむくぞ。たぐか

○よめて
よめてよりの、
りを者けるな
り。はぐらの物
を、かやうとい
るも、あつ。肯
庵も、是をも
てあをびて、晨
夕老をつする。
川で、書院を、弄
花軒と号すと
あり。

りの菴のみ、のどけくして、おそれなく、ほととせば、いとくども、夜あす、床あり。晝居る、座あり。一身をやどすよ、不足なく。がうたを、ちひさき貝をこのむ。是よく、身を志るよ、よてなり。みまごを、荒磯よみる。則ち、人を恐るゝよ、よりてなり。我、又、かくのどくし。身を志り、世を志ねらむ、頼もず、まじらさず、たぐ、志づかなるを、望みとし、うねひなきを、樂みとす。すて、よの人の、住家をつくるを、らひかたらずし、身のためとせず。あるも、妻子眷属のため、つゝり、或も、親昵朋友のため、作る。或

そ、主君、師匠、及び、財寶馬牛のためよさへ、これを
作る。我今、身のためよむすべり。人のためよ作ら
ず。ゆゑ、いかにとたれど、今の世のならひ、此身の
ありさま、ともなふべき人もなく、たのむべき、や
つともなし。たとひ、廣くつらなりとも、誰をこのや
ど、誰をこのすゑむ。それ、人のともたす者も、この
るをたやとみ、ねんごろなるをさきとす。かた
すしも、情あると、直なるとをた、愛せざ。たゞ、糸
花月を友とせむ。また、志かす。人の奴たるものを、
賞罰の甚ど、恩顧のあつきを重くす。さらよ、

○いづ
○すなはちを
所なり。文字の
腰ら、も
やあらん。
すなはち、ハ
すなはち、ハ
いづ、下、の
分をつ、下、の
つ、下、の、
さ、下、の、
身をつ、と
い、と

は、いづ、み、あ、れ、お、と、い、く、も、や、す、く、閑、の、な、る
を、た、ね、が、を、す。た、だ、我、身、を、奴、婢、と、す、る、よ、を、志、か
す。い、か、ど、つ、ご、の、身、を、奴、婢、と、す、る、な、ら、ん、と、も、な、し、
べき、こと、あ、れ、を、則、ち、お、の、づ、か、ら、身、を、つ、か、ふ。た
ゆ、か、ら、ず、も、あ、ら、ね、ど、人、を、志、た、が、く、ひ、と、を、か
つ、り、み、る、よ、り、を、や、す、し、も、あ、り、く、べき、事、あ、れ
な、み、づ、か、ら、あ、ゆ、む。苦、し、と、い、く、も、馬、鞍、牛、車、と、
心、を、た、や、ま、す、よ、を、志、か、す。今、一、身、を、口、か、ち、て、二
の、用、を、た、す、手、の、や、つ、こ、是、の、乗、物、よ、く、我、心、よ、か
な、つ、り。又、心、身、の、く、く、み、を、志、た、ら、ん、を、苦、し、む

時も、やすめつ。まめなる時をつかふ。つめあとして
も、たびびくすむさず。ものう〜とて、心をつらうか
すことなり。いかよ、況んや、つねよありき。つねよ
働くと、是養生をさすべし。何ぞ、いたづらよやすみ
をらん。人を苦しめ、人を悩ますも、又罪業なり。い
か、他の力をかるべき。衣食のたぐひ、又おなじ。
藤の衣、麻のふすま、うるよ志たがひて、はたぐを
かく〜、野べのつごを、峯のこのみ、つごかよ、命を
つぐばかりなり。人よまどらをも、たぐれた、姿をばづ
る、悔いもなり。かて、とも〜、けれど、おらそかなれ

○それ
それと、いふ詞を
指示代名詞を
指す、それと、指

ども、なほ、味ひをあまゝす。渾て、かやりの樂み、富
る人よ、對して、言ふよを、あらず。唯、我身つらよと
りて、昔と、今とを、たぐらぶらばかりなり。大かこ
世をのがれ、身をすて〜より、くらみもなく、おそ
れもなし。命を、天運よまかせて、を〜ます。いと
ず。身をぞ、浮やよを、ずらして、たのます。ま〜と
せず。一期のたの〜びを、うた〜ねの枕のう〜よ、
きこ〜まり、生涯のゆきみを、をり〜の、美景よ、残れ
り。それ、三界も、たぐ心つらなり。心も〜、やすから
ず。牛馬、七珍も、よ〜なく、宮殿、樓閣も、望みなり。

すばきものを
くてもいあま
いさきなり。こと
もと漢籍にあ
る。夫の字か
を後みなれて
斯くも、つと書け
るなり。漢籍
の夫字をそれと
初みそめども
昔よりの誤り
るやあらざる
ん。

今、さびしき住居、一間の菴、みづから、是を愛す。おのづから、みやこよりでて、を食となれり。ことをば、づと、いへども、かへりて、こゝに居る。ときを、他の俗塵よ、着する。ことをあそべ。も、人、このいへることを、疑も、魚と鳥との、分野をみよ。魚を、水よあかす。魚よあらざれば、それ心を、いかてかたらん。鳥を、林をねがふ。鳥よあらざれば、そのころを、あらず。閑居の氣味も、まご、かくのごとく。住まずして、誰のさくらむ。そも、一期の月、影か、さびきて、餘算、山のは、よ近し。忽ち、よ、三途の、園

よ向む時、何のさびを、かこたむとする。佛の、人を、へたまふ。おとむきを、ことよ、ふれて、執心な、かれとなり。今、草の菴を、愛するも、科とす。閑寂よ、着するも、障りなるべし。いか、用なき樂みを、のべて、むなしく、あたら時を、すざらん。志づかなる、曉は、ことよりを、思ひつづけて、みづから、心よ、とひて、いそぐ、世を、のがれて、山林よ、まじを、るも、心を、をさめて、道をおとを、をむ、為女なり。志、かゝるを、汝、姿を、ひどりよ、似て、心を、に、ごりよ、志めり、住家も、別ち、浄名居士の、跡を、けがせりとい

へども、たゞのつこころをもつづかよ、周梨槃特が行
ひよだよも及ばず。もし、これ、貧賤の報のみづか
ら、悩ますら。そよ又、忘心のありて、くらやせらる。
そのとき、心さらよ、暮らるることなり。たゞよ、舌根
をやらひて、不請の念佛、兩三反をまうして、や
みぬ。時よ、建曆の二とせ、弥生の晦日、桑門蓮胤、
外山の菴よして、これを志らす。

月かげを、つら山のをもつらかりき
たえぬひよりをみるよーもかた

和文教科書五之卷終

